

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010年 10月 31日

派遣者名（専門分野）	富田 暁（東洋史学）
------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	近世後期東南アジア海域世界における西ボルネオ：ポンティアナックを中心に
-------	-------------------------------------

派遣期間

2010年 8月 24日 ～ 2010年 9月 19日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	オランダ王国	デン・ハーグ	国立公文書館 (Het Nationaal Archief)	
		ライデン	王立言語・地理・民族学研究所 (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde)	
		ライデン	ライデン大学図書館	

派遣先で実施した研究内容

派遣者は研究テーマである、「近世後期東南アジア海域世界における西ボルネオ：ポンティアナックを中心に」に関する史料調査・収集を派遣先で行なった。今回調査した主な史料は、18世紀後半から19世紀前半期における、オランダ東インド会社史料、並びに蘭領東インド政府史料である。

その中でもまずは、アジア各地のオランダ東インド会社商館からアジアの拠点であるバタヴィアの総督府を経由して、オランダのアムステルダム本社へ送られた文書群で、現在はデン・ハーグの国立公文書館に所蔵されている、OBP(Overgekomen Brieven en Papieren uit Indië aan 17 en de Kamer Amsterdam)を調査・収集した。西ボルネオには1778年からオランダ東インド会社が進出し、10年間ほどで撤退するものの、ほぼ同時期に西ボルネオに成立して勢力を振るったポンティアナック王国を始めとする現地諸勢力と関係を持っていた。今回調査したOBPの中には、オランダ東インド会社が作成した現地情勢報告、バタヴィアとのやり取りの記録、交易に関する記録など様々な有益な情報が含まれており、それらを閲覧し収集することができた。その他、オランダの本社と共にゼーラント支社へも送られた文書も併せて閲覧・収集も行った。

OBPと並ぶ重要な史料として、オランダ東インド会社社員や、後には蘭領東インド政府の植民地官僚、学者などが西ボルネオに関して記した、各種の記録・報告書などがある。これらは彼らが実際に西ボルネオに赴いた際に現地で得た経験・知識をもととした詳細な記述のものも多く、現地を描いたスケッチや地図などが挿入されているものもあり、OBPには記されていない情報も数多く含まれている。そして、オランダ東インド会社が西ボルネオから撤退した後に、19世紀初頭

に再び到来し、同世紀の中頃から年次の『植民地報告書』を作成し始めるまでの間における史料の「空白期」を埋めるものでもあり、そして『植民地報告書』も西ボルネオに関しては多くを記述しないために、その史料的価値は高い。

ライデンの王立言語・地理・民族学研究所およびライデン大学図書館においても同じ様に、主に19世紀前半における蘭領東インド政府の植民地官僚や学者が西ボルネオに関して記した記録・報告書などの閲覧・収集活動を行った。

各機関における調査の手法に関しては、国立公文書館でマイクロフィルム化されているものは、マイクロフィルムリーダーに備えてあったスキャナーを使用してデータをPDF化して収集し、国立公文書館や王立言語・地理・民族学研究所で原本を閲覧したのものに関しては基本的にデジタルカメラでの撮影によって収集した。

史料の閲覧・収集以外では、それぞれの施設で出会ったオランダを始めとする各国の研究者と交流を持ち、史料や研究に関する情報交換を行うことで、今後の史料調査や研究へと繋がる成果を得ることが出来た。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

史料の収集においては、当初の計画通り西ボルネオに関するOBP史料を網羅的に調査・収集することに成功し、オランダ東インド会社の西ボルネオにおける活動期間は比較的短期間ではあったが、当時のポンティアナックや西ボルネオの状況解明に資する多様な情報を含む史料を調査・収集することが出来た。

その他の史料に関しては、現地で改めて調査・確認した結果、当初の予測以上の分量が存在することが判明したこともあり、全ての史料を網羅的に調査・収集することは叶わなかったが、全体として概ね計画を達成することが出来た。その中でも、分量的にはオランダ側が残した史料と比べると僅かなものではあるが、ポンティアナックを始めとする現地側が残した史料を調査・収集できたのは、今回の調査成果の大きな一つである。これらの多くはジャウィ（ここではアラビア文字表記のマレー語の意）で記されており、両者の史料を対照することで、当時の西ボルネオの状況をより立体的に描き出すことが期待できる。

派遣後の研究発表の予定

今回の調査成果発表の場の一つとして、2011年5月に東京で開催予定である、東南アジアの港市国家に関する国際シンポジウムにおいて研究発表を行う予定である。

また、査読誌への投稿論文として成果を公表する予定である。